



50の やん! #5

ペット攻めたり編

著:藍澤たすく

イラスト:かもめ遊羽

「らのけん」でお話?

三郷学園高校「ライトノベル研究部」

——通称「らのけん」。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを目的とした志しの高い部活動……のはず、なんだけれど……。アレ? 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまつり系日常部活「コメティイ」なのです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情徑行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

「らのけん」顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。そしてまさかのラノベ作家デビュー!?



赤城操

クールビューティーな眼鏡っ子担当。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦労は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



紺野司

ラノベ作家としての華子を担当する編集者。AG文庫編集部所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

「うーん、あそここのバトルシーンはもつと派手にした方がいいかしら……もふつ!?」
 放課後、いつものようにならのけん——ライトノベル研究部——の部室の扉を開けた華子は謎
 の白い物体と衝突した。

「あー、華ちゃんごめーん！ 今どかすからーー！」

部室の中から快活な萌の声がした。

「? ?」

ぶつかった反動で廊下に尻餅をついてしまった華子は、目を白黒させて目の前の謎の物体を見つめている。

それは一言でいえば「白いふさふさ」だった。

白くてふさふさした何かが部室の入り口をすっかり塞いでいる。

「はい、太郎、こっちおいでー！」

萌の声に従つて白いふさふさが歩いて移動する。

え？ 歩いて？

これつてもしかして生き物……？

「お邪魔しまーす……」

白いふさふさの後を追う形で、華子はおそるおそる部室のドアをくぐる。

「!？」

そこにはいたのは白い犬だった。

犬だと思うんだけど……。

犬なんじゃないかな……。

というのも、によつと生えた尻尾らしき部分を除き、顔も胴体も前足も後ろ足も白くて長いふさふさな毛に（おそらく）隠されて、どう見ても「白くて丸いふさふさ+尻尾」にしか見えなかつたからだ。

そして大きい。

身長148cmの華子よりずっと大きい。

丸いふさふさの直径はざつと160cmはありそうだつた。

「はい、太郎 華ちゃんにご挨拶してー！」

白いふさふさは萌に促されるようにぴょこりと頭（らしき部分）を下げた。

「あ、どうも。これはこれはご丁寧に……って、緑川さん、なに学校にペット連れてきてるの!? だめじゃない！ 学校に関係ない物持つてくると、最終的にはあたしが怒られちやうんだから！」

「関係なくないよ～、この子資料だもの～」

「資料？」

「そつ！ あたし今この子をモデルにした話書いてるから。生ける資料つてわけ♪」「うくん、資料なんか……」

華子は眉を八の字にした。とても判りやすい困り顔だ。

「じゃあしようがないかな……今回だけは大目に見てあげる♪」

「やつた！ だから華ちゃん、大好き♥」

萌は嬉しそうに華子に抱きついた。

資料と言えばなんでも通るし、経費で落ちる。それがラノベというものだ（違う）。しかし、その刹那。

丸いふさふさの中からカメレオンの舌のような物が伸び、空中の蠅を素早く捕捉した。

「!?’

華子がぱちぱち瞬きをしていてる間に、カメレオンの舌はまたスッとふさふさの中に戻つていった。太郎の口（らしき部分）が何かを咀嚼しているようにもぐもぐと動いている。

太郎に背後を向けていた萌はもちろん何も見ていない。

「緑川さん……？」

「なに？ 華ちゃん？」

「これ……犬だわよね？」

呆然と立ち尽くす華子が囁くように質問する。

「多分そう！…………うーん、でもよく判らない！」

「!？」

萌がてへペロしながら意味不明の回答をする。

「この子、今、親戚の子から預かってるんだ。元々あたしが飼つてたわけじゃから、詳しいことはわかんない！」

「わかんないって……」

華子が恐怖の入り交じった視線で「太郎」を見つめる。

「前言撤回です。すぐにこの子を連れて帰」

「おー！ 太郎じやーん！ 連れてきたんだー！」

青山一斗は部室に入つて来るなり、わしやわしやと「太郎」を撫でた。「太郎」もまるで甘えるように一斗に顔（らしき部分）をすりすりと擦り寄せる。

「あはははは、やめろ、やめろって、くすぐったいぞこいつ！」

「太郎、青やんにめつちや懷いてるもんね！」

「こほん」

「太郎」とじやれ合う二人に咳払いをして注目を促す華子。

「ん？ どうしたの？ 華ちゃんもすりすりされたい？」

「違います！ すぐその『太郎』をお家に連れて帰つて下さい！」

「「えーなんでーー!?」」

萌と一斗が異口同音に不満を表明する。

「さつき、華ちゃんいいよって言つてくれたじやーん！ 女に二言はないでしょー！」

「そーだそーだ、横暴だー！ （よく判らんけどー！）」

萌と一斗が華子に詰め寄つたその時。

丸いふさふさからまた舌が伸びて、今度はテーブルの上のお菓子を皿ごと捕捉した。

「あー！ あーーーー！」

華子が「太郎」を指さして絶叫する。

「何よ、華ちゃん。そんな事して誤魔化そうつたつてそうはいかなんだからね！」

「違う！ 違うのー！ 今、今、『太郎』がそこのお菓子を長い舌で巻いて食べたのーー！」

「「はあ？」」

萌と一斗がまたもや異口同音に疑念を表明する。

「太郎は賢い子だからそんなことしないよ。そもそもそんな長い舌なんかないし〜」

「ほら太郎、お手！　お～可愛い可愛い～」

前足（らしき部分）を一斗の右手に乗せる太郎。

一斗は愛おしそうにそんな太郎の頭（らしき部分）を撫でている。

「そんな事言つて誤魔化されるあたし達いやな……あつ、テーブルのお菓子がない!?」

「でしょー！　でしょー!?」

「もー華ちゃん、いつの間に一人で食べちゃつたのよ。だめでしょ、この食・い・し・ん・坊・さ・ん★」

「だーかーらーちーがーうーって言つてるでしょーー！」

華子が両手をグーにして振りながら、その場でじたばたと地団太を踏む。

何このかわいい生き物。リビングに常置して思う存分すりすりしたい。

「食べたのー！　この子が食べたのー！　お皿ごと、こう、ぱーん、がりがりつて！」

「「…………」」

「な、なんですか、二人とも……」

ジト目で自分を見つめる一斗と萌に気づいた華子は、その視線の迫力に少し気圧される。

「華ちゃん、わざわざそんなウソ言わないでもさ、犬が苦手なら苦手って言いなよ」

「ふあ!?」

「青やんの言う通りだよ。そんな根も葉もない濡れ衣着せられたら太郎、可哀想だよ……」

（落ち着くのよ、華子……さつきのがもし、もし目の錯覚だつたとしら……）

「ふあ!?　ふあ!?」

ちょっと涙目で訴えてくる萌に華子はたじたじになる。

「……何、あたしが悪いの!?　あたしが間違つてるの!?」

（落ち着くのよ、華子……さつきのがもし、もし目の錯覚だつたとしら……）

華子はおずおずと「太郎」を見やる。

一斗とじやれ合つているソレは、やはり犬のように見える。

（そうだよね……こことのところ原稿の執筆と委員会の仕事が重なつて忙しかつたし……あたし幻を見たのかも……でもお菓子のお皿は確かに……あれ、そもそも今日、あたしお菓子の準備なんとしてたつけ……？）

ぐるぐると考え出した華子は何が現実で何が妄想だったのか、だんだん判らなくなつてくる……。

「おい青山ー！　さつき福本がお前の事探してたぞー」

「福本が？　あつ、やつべ、俺あいつに物理の教科書借りたままだつたわ。ちょっと返してくれー！」

「萌ーいるー？　そろそろ補習始まっちゃうよー」

「あ、そうだった、すぐ行くね！　ごめん、華ちゃん、ちょっと太郎見てて！　大丈夫、大人なしい子だから！」

「え？　え？」

不意に一斗と萌がいなくなつて、華子は「太郎」と二人（一人と一匹[?]）ぱつんと部室に取り残された。

「あははは……た、太郎ちゃん、緑川さんと青山くんが帰つてくるまで、あたしと一緒に大人しく待つてましようね～……」

華子は怖々と「太郎」の方を振り向いた。

「太郎」はしばらくきょろきょろと頭（らしき部分）を動かして何かを確認するかのように周囲を見回していたが、やがてびたりと動きを止めた。そして。

【ウガアアアアアアアア!!】
「きやあああああああ!?」

「太郎」の咆哮^{ぼうこう}と華子の絶叫^{ぜつきょう}が重なつた。

それもそのはず、白いふさふさの「太郎」が突然割れてめくれて、巨大なヒトデ型の化け物になつたからだ。

「太郎」の内部はふさふさの白い毛と対照的な赤黒いぬめぬめした質感の肉の塊^{かたまり}だった。そ

こに不規則にびっしりと歯のよつなものが並んでいる。

【ウゴウウ!!】

【きやあー!!】

「太郎」が華子に飛びかかる。ヒトデの触手^{しょくしゅ}が一気にすっぽみ、「太郎」はまた白いふさふさ状態に戻つた。

すんでのところで床に転がつて身を避けた華子だったが、華子が座っていた椅子^{いす}は「太郎」の口の中にはいった。

バリバリゴリゴリと金属が砕けるイヤな音がしてから、「太郎」は椅子をぐくりと飲み込んだ。

【ひいいい……】

華子がひりついた悲鳴を上げると同時に、また「太郎」はヒトデ状の化け物となつた。

それがゆつくりと華子の方に近づいてくる。

【こ、来ないで！　来ないで！　来ないで……】

そしてあまりの恐怖に、華子はその場で意識を失つてしまつた……。

【ただいまーっと。あっ、華ちゃん!?】

部室に戻ってきた一斗は床に倒れた華子をいち早く見つけて駆け寄つた。

その時にはすでに「太郎」は元の白いふさふさに戻つていたのだつた……。

「ん……」

「『華ちゃん、気がついた!』」

ソファに横たえられていた華子はゆっくりと上半身を起こした。まず目に入ってきたのは申し訳なさそうにしょぼくれる萌の顔だった。続いて心配そうにこちらを見ている一斗。

「ごめんね、華ちゃん……」

「え?」

萌がおずおずといった様子で口を開いた。

「あたし、華ちゃんが気絶するほど大が苦手って知らなかつたから……ごめんね、ほんとごめんね!」

「そ、そんなことない! そんなことないわよ!」

「本当? 本当に?」

「うん、うん!」

涙目で華子の手を握る萌に、華子は力強く頷いた。

「……でもじやあ、なんで華ちゃん倒れてたの?」

「え、それは……」

言いかけて、華子の視界に一斗の後ろにいる「太郎」が映り込む。

「ひつ……」

先ほどの記憶がフラッシュバックした華子は、すざざざざとソファの上を後ずさりした。

「やつぱり華ちゃん、太郎のこと、嫌いなんだね……」

萌はしょんぼりした顔で俯く。

「ち、違うの! さ、さつきのはちょっと貧血で倒れただけなの。ほ、ほら太郎とだつてこんなに仲良く……仲良く……」

しょげかえる萌を励ますために、華子は勇気を振り絞つて「太郎」に近づき、その頭を撫でた。

（さ、さつきのは貧血で見た幻覚だわ……きっとそつよ! あんな恐ろしいことなんて起つわけないのよ……!）

「わあ……」

目をぎゅっと瞑つて、冷や汗をかきながら、プルプルと震える手で「太郎」を撫でる華子の姿を見て、萌は歓喜のかんきのため息をこぼした。

「ね!? ね!? 太郎、可愛いでしょ、華ちゃん!」

「う、うん、か、可愛い……スゴクカワイイ……」

「良かつたねー、太郎！ 華ちゃんに気に入つてもらつてー！」

萌に撫でられた「太郎」はクゥーンと甘えた鳴き声で彼女にすり寄つた。

そして同じように華子にもすりすりする。

（あ、なんかふわふわして良い匂い……この子本当にちょっと可愛いかも……）

「……太郎、お手」

「ワン！」

華子がおずおずと手を出してみると、太郎は前足（らしき部分）をすぐに乗せてきた。

肉球の感触がぶにぶにでふわふわだつた。

「うんうん、いいねいいね！ あたし、華ちゃんと太郎見てたらとってもいいシーン思いつい

ちゃつた！ 早速書こうつと！」

萌は超ご機嫌な様子でPCの前に座るとぱこぱことキーを叩き始めた。

その姿を見て華子もなんだか心が温まつてくる。

（あたし……やつぱり疲れてるんだわ……こんな可愛い太郎がまるでエイリアンみたいに見えるなんて……）

華子はごめんね、という気持ちを込めてもう一度太郎の頭をなでなでした。

その時、太郎の口（らしき部分）から何かがこぼれ落ちた。

それは部室の椅子の足の先についていた4つの保護ゴムパーツだつた。

「きやああああああっ!?」

華子の絶叫が再び部室に響き渡つた。

三郷学園高校ライトノベル研究部は今日も平和である。

つづく

● 「らのけん！」 シリーズ掲載号一覧

G A 文庫マガジン7月24日配信号…らのけん！
 G A 文庫マガジン9月合併配信号…らのけん！
 G A 文庫マガジン10月27日配信号…らのけん！
 G A 文庫マガジン11月27日配信号…らのけん！

4 3 2

夢の最終選考編
 はじめてのおつか……うちあわせ編
 思い切つて告白しちゃうぞ編